

母なる自然・父なる自然

「オツベルと象」論

小 埜 裕 二

一、白象誕生譚

宮沢賢治の「オツベルと象」(「月曜」大正一五年一月)は、オツベルに酷使された白象が仲間の象達に救い出される話だが、オツベルは結末で象達の一団に押しつぶされる。そこには団結することの尊さや過酷な搾取者は罰を受けるという意味あいが示されているが、本作はその提示だけに終わっているのではない。白象は救出されたあと「さびしくわらつて」仲間と礼を言う。この白象のさびしさの表出に、プロレタリア文学や応報文学にはない賢治ならではの意味が込められていたことはいまでもない。さて「オツベルと象」を詳細に論じた阿部昇氏はこれまでの研究を四つに分類した^①。第一は搾取される者達の団結の威力とその尊さを読みとるもの。第二は白象を救い出す象達に理想の農民像を読みとるもの。第三は白象のデクノボー的生き方の敗北を読みとるもの。第四は白象の生き方に仏教説話のジャータカ譚的使命を読みとるもの。第一第二グループ

は団結の尊さに力点を置いたもので、第三第四グループが問題の白象のさびしさの内実に応えたものであった。そのうち第四グループは氏がいうように特殊な読みであるが、これが一般に広く受け入れられている。

だが池上雄三氏の論^②を中心とする第四の説は、阿部氏が子細に検討しているとおり無理がある^③。白象の登場は「農民(小作人)の身代わりとなって、搾取者オツベルを救う(改心させる)ためだった」「白象が何もかも最初から知っていて、忍耐している」とはいかにも考えにくい。池上氏は「ひたすら忍びに徹し、己れの運命に服従して生きようとし続ける賢治が書かれている。それと同時に、徹しようとしても徹し切れない自分、運命に従おうとして自分を消そうとして消しきれない自分が残ってしまうという告白をもしようとしたのである。そしてこのような『救われないジャータカ』こそ、自我の相剋に苦しむ近代人のジャータカなのだ」と賢治はいおうとしたのであろう。という。現代にジャータカ譚は成立しないという見解は面白いが、だが白象がオツベルを救いに来たのでない以上、

また白象が忍びに徹しようとする自覚的な姿勢を持たない以上、「救われないジャータカ」譚は成立しない。

清水正氏の主張も池上氏の説に近い。氏の主張の出発点は「白象の価値は、無垢であること、オツベルを一度も疑わなかったこと、何もかも善意で受け止めたこと、無償の行為（労働）に感謝していたこと……である。そして、こういったことを貫き通すことは、同時に『苦しい』ことなのである。しかし、白象が月の言葉（アドバイス）に耳を傾け、その言葉を受け入れたとき、彼は自らの心の裡に潜むへ赤い龍の台頭を許してしまったのである。白象の純粹無垢はそれに徹することでへ滅びへへと成就し、へ滅びへへと成就することである。」⁽⁶⁾というところにある。氏は白象をキリスト教的文脈から「メシア的体现者」と捉え、メシアの化身である白象は自己犠牲の道を選ぶはずであったが、うちなる悪魔の声に耳を貸してしまったと考えるのである。だが繰り返すが、白象にメシアや菩薩の自己犠牲を行う宗教的使命があったとは考えられない。

ただ清水氏が問題とするのは白象の深層心理である。表層の物語とは別だとするなら、「月」へ赤衣の童子へ山の象へは白象の意識されざる内なる「自己」の投影である⁽⁷⁾と捉え、白象がオツベル殺しを企てたという読みを行っても結構である。ただ白象の心理をいかなる深層で捉えようと、白象の一連の行為が「巧妙狡猾なへやり方」⁽⁸⁾であったとは考えにくい。氏のいう表層の物語とは白象救出と嚴罰主義への疑義のドラマであり、阿部氏のいう第三グループの主張に合致する。氏はそうした読みを「驚くばかりの単純な設定」⁽⁹⁾

という。だが白象の深層心理に「純粹潔白を装った巧妙な意識されざる欺瞞性」⁽¹⁰⁾を見いだす読み方も作品をつまらないものにしていて。作品の表層が氏の言うとおりなら白象の深層に眼を向けたくなるのも分かるが、表層の物語自体がこれまで読み誤られてきたのではない。

阿部昇氏は、白象のさびしさを読みの可能性から五つ上げている。⁽¹¹⁾一つは信頼をオツベルに裏切られたさびしさ。二つはオツベルのような生き方に出会って、これまでの生き方では生きていけないことを知ったさびしさ。三つはオツベルのような人間とも心を通じ合わせなかったが、それが出来なかったさびしさ。四つはオツベルを結果的に殺してしまったさびしさ。五つは戦い殺し合わなければ生きていけない現実を知らされたさびしさ。それらのさびしさを大別すれば、白象が自分の生き方を否定されたこと、相手の生き方を否定せざるを得なくなったことに分けられよう。白象のさびしさを問題にした多くの先行論者も、氏とはほぼ同様の構図から本作を理解してきた。そしてこの構図を基に白象、オツベルに代表される存在の意味するところを求めて議論が重ねられてきた。

オツベルの存在については彼が農村地主であれ資本家の象徴であれ過酷な搾取者という意味で読んでもよいが、白象的存在の意味については自己犠牲性をむねとするジャータカ譚の存在といった理解や、労働に喜びを感じそれを自分の任務にしたといった理解⁽¹²⁾は出来ない。これまでの白象把握はその生き方を自覚的なものとしてきた。だから白象のさびしさを敗北の証と見たのである。だが白象は自身の生き方を否定されたのか。たしかに白象がオツベルの命令に従っ

て従順に働くところに、無抵抗なデクノボイの生き方のようなものは見られる。だが白象がそうした生き方を自覚的に選びとった存在であるとはその無邪気さからは読み取れない。白象には否定されるべき確固たる自身の生き方はなかった。あったのは白象が白い象であるゆえに無意識に、存在様式として最初から身に備えていたものだけである。白象は自らの聖なる使命に気づかない無垢な象として登場してくる。そうして登場した白象がオツベルの死によって何かに気づかされるのである。それは生き物は殺生を避けて生きられないというへ修羅の現実ではなかったか。そしてその現実自身は救われようとした結果もたらされたものであることに気づいたのでないか。白象のさびしさは死という現実を知った驚きであり、へ修羅の現実を知ったさびしさであった。そしてへ修羅の現実と今後無縁ではいられなくなったさびしさ、無垢の世界が失われたさびしさであった。さらに言うなら、これからの厳しい道をひとり歩いていかねばならないさびしさであった。

そのあと白象はどうなっていくのか。これまでの研究では、さびしさを味わった後の白象については不問にふしてきた。なぜならオツベルの死がこの物語の一連の事件の終結であり、その後の白象がどうなっていくかは読者の想像にまかせるしかない問題とされてきたからだ。白象はオツベルの存在が救われる世界を求めるのか、オツベルの存在が滅ぼされる世界を容認するのか。その答えは白象のさびしさを白象の敗北と読むかぎり、テクストに明示されないものとなる。だがそのさびしさを白象が何かに気づいた徴とするなら、その後の白象がどのような道を進んでいくかは想像される。オツベ

ルの死からへ修羅の現実を知り、自己が救われようとした結果のさびしさを知った白象は、その後はもはや自己救済を求めず、生まれてもって備えてきたデクノボイ的自己犠牲の道を自覚的に選びとっていくのではないか。本作は無垢な白象が聖なる白象へと生まれ変わる誕生譚として書かれていたように思う。一般に知られる『法華経』普賢菩薩観発品に登場する白象の誕生譚と言つてよいであろう。普賢菩薩の乗り物として登場する白象がいかにして誕生したのか、そのいきさつを賢治は『法華文学』として描きだしたのではないか。仏の前世を描いた本生譚である『ジャータカ』の影響を考えるならば、さびしさの自覚を得た白象に接続するかたちで自己犠牲を行うジャータカ譚の白象があったと考えるべきであろう。

二、母なる自然

「四日の月」を見ながら白象は「ああ、せいせいした。サンタマリア」と「ひとりごと」を言う。この「ひとりごと」に注目して谷川雁氏は「月」と「サンタマリア」は別物だと述べる⁸⁰。男性的物言いをする月の言葉を聖母サンタマリアの声とすることは確かに難しい。キリスト教では「マリアは人間、月は星。それがへ混同」されることはない⁸¹。と氏は言う。では「教義上の焦点の一つに誤解をもたらしてはまずい」からサンタマリアと月は別物とされたのか。日本では氏もいうように太陽をアマテラス、月をツキヨミといった人格神とみなすことに違和感はない。だから教義を頼りに月とサンタマリアが別物とされたとは考えにくい。普賢菩薩がサンスクリッ

ト語読みで「サマンタバダラ」ということからサンタマリアを菩薩と説く説がある。この場合、サンタマリアはサマンタバダラで、その化身が月となる。月の声が男性的であることの説明にはなるが、サマンタバダラをサンタマリアと呼んだ理由が分からない。やはりサンタマリアという呼称に意味があったのではないか。月とサンタマリアの関係はどのようなものであったのか。「十一日の月」と白象の会話は次のようなものである。

ある晩、象は象小屋で、ふらふら倒れて地べたに座り、藁もたべずに、十一日の月を見て、

「もう、さようなら、サンタマリア。」と斯う言つた。

「おや、何だつて？ さよならだ？」月が俄かに象に訊く。

「え、さよならです。サンタマリア。」

「何だい、なりばかり大きくて、からつきし意久地のないやつだなあ。仲間へ手紙を書いたらいいや。」月がわらつて斯う云つた。

月の言葉は確かにサンタマリアの生の声ではないが、月の言葉は月自身の声でありながらその内容はサンタマリアの気持ちを代弁したものでなかったか。月や星ばかりでなく鳥や虫、石塊にいたる自然界のあらゆる事物が賢治の童話にあつては生き生きと言葉を喋る。たえず月に向かつて語り続けた白象であるからこそ、月はサンタマリアとは異なる存在であつても、月の満ちゆく様があたかも白象の思いを受け入れていった証であるかのように、最後には白象の気持ちを汲んで月がサンタマリアの思いを代弁するのである。その

際、月はサンタマリアがのりうつった操り人形として、すなわちサンタマリアの生の声を伝える依代として登場するのではない。月は確固たる生きた存在としてサンタマリアの気持ちを語る。サンタマリアが男性の言葉を語ることでサンタマリア以上の「奇妙な超越者」となったのではなからう⁹⁴。

清水正氏もサンタマリアの言葉と月の言葉を別物と見る。氏は「残酷な迫害にあつてゐる者に向かつてサンタマリアが『仲間へ手紙を書いたらいいや』などというアドバイスをするのは全く考えられないのである。こういったアドバイスは、サンタマリアではなく、サンタマリアを装つた悪魔がすることであらう」という。こうした理解は月の言葉がサンタマリアの言葉でもなく、サンタマリアの気持ちでもないと二重の意味で、月の言葉をサンタマリアの言葉から離れさせている。だがサンタマリアは月の声を借りて、あくまで白象を救い出そうとしたのではないか。本物のサンタマリアなら白象の「純粹無垢、無償の行為」を受け入れ、彼の滅びを悲しみとともに受け入れたであらうと氏はいう。だが、それは白象をメシアとして見るからそうなるのである。「菩薩の自己救助の要請」という前提さえ取り払えば、氏のいう「白象の価値は、無垢であること、オツベルを一度も疑わなかったこと、何もかも善意で受け止めたこと、無償の行為（労働）に感謝していたこと」はそのまま白象のありようとして生きてくる。白象がそうした無垢な存在であるなら、サンタマリアが白象を救うことに違和感はない。

清水氏は作品最終行の「川へはいつちやいけなかつたら」という言葉だけが、サンタマリアの言葉だとする⁹⁵。「最終行は語りのいわ

ば水平的な文脈の中に、突然天から落雷のように垂直に落ちてきた」という。最後の言葉は「牛飼い」が眼の前の子供達に語った言葉であるが、比喩として言うなら牛飼いの言葉がサンタマリアの声だという考えに賛成である。それは確かに天から落ちてきたような言葉として唐突に記される。あたかも「やまなし」において子蟹が死の何であるかに気づこうとしたときへかわせみ³が飛来し、また子蟹が喧嘩をしてへ修羅⁴の何であるかに気づこうとしたときへやまなし⁵が落ちてきたような天からのうながし⁶が結末の一行にはある。サンタマリアの言葉は、無垢な存在を傷つけないために天から降ろされた母の慈愛の手である。

だがそれなら白象の命を救おうとする月の言葉もサンタマリアの言葉と考えてよいのではないか。月と言葉を交わす前、白象は「赤い龍の眼」をしてオツベルをじつと見下ろすようになっていた。「赤い龍の眼」は白象の怒りの心のあらわれであろう。白象の怒りは白象自身の無垢性を損なわせるものとなる。サンタマリアは白象の怒りの萌芽がどの方向に向かうかを承知で、怒りによってへ修羅⁴のさなかに身を置くことがないよう白象を救い出そうとしたのである。サンタマリアは牛飼いの言葉を借りて川に入る子供達を救おうとし、月の言葉を借りて白象を救おうとしたのだ。子供達や白象が救われようとしたのは、彼らがまだへ修羅⁴の現実を知らない無垢な存在であったからであろう。へ修羅⁴の現実から白象を遠ざけ、その無垢性を守ってやる天のうながしを、賢治はキリスト教のサンタマリアの慈愛というかたちで具象化したのではなからうか。

三、父なる自然

「オツベルと象」には白象の苦境を救うものとしてサンタマリアと仲間の象達がいる。サンタマリアは母的存在としての救い手であり、象達は父的存在としての救い手である。無垢な存在を救う者としてサンタマリアがいたように、無垢な存在を傷つける者を罰する存在として仲間の象達がいる。「注文の多い料理店」の二人の紳士が山の動物を興味本位で殺そうとしたために、逆に殺される側の立場に立たされ、罰せられることになるのはこの父的存在としての救い手の怒りの例だと考えてよい。へ修羅⁴の現実にはまだ気づかない無垢な存在である「やまなし」の子蟹は救われ、へ修羅⁴の現実を色濃くなぞる「注文の多い料理店」の紳士達は泣いた顔がもとに戻らない罰を受ける。その相違はへ修羅⁴の現実にはまだ気づかない無垢な存在か、その現実を知らながら殺生を行う存在かにある。オツベルは白象の無垢性を損なわせようとしたため罰せられる。天からは救うものと罰するものの二つの大きな手が地上に降りてくる。それをへ母なる自然⁷（父なる自然）と呼ぶことにしよう。「やまなし」にはそのうちのへ母なる自然⁷が描かれ、「注文の多い料理店」にはへ父なる自然⁸が描かれた。本作はその両方が表されているのである。

だがここで注意しておきたいのは、賢治の童話にあつては「やまなし」の父蟹や「水仙月の四日」の父が優しい慈父的存在として登場するように、必ずしもへ父なる自然⁸が賢治童話の現実の父像と

は合致しないことだ。〈父なる自然〉は優しい父として登場する存在ではなく、「猫の事務所」の結末に登場する獅子のような、荒々しい正義の権化として登場してくる。また賢治童話にあつては「やまなし」に母が登場しないように母像が表されることは少ない。母の代理を父がするといったタイプの童話が多く、それは「父系型の經典」⁸²とされる『法華経』の影響が考えられるところであろうが、ここでは賢治童話に登場する父母の姿と〈父なる自然〉〈母なる自然〉とが別物であることだけを述べておきたい。現実世界の父母の役割と〈父なる自然〉〈母なる自然〉の役割のかかりについては、あらためて論じることにはしたい。

ところで小森陽一氏は本作にインド独立運動の影響を見ている⁸³。

一九二〇（大正九）年から翌二一年にかけて、一九一七年のロシア革命とその後の干渉戦争に対する赤軍の世界的な民族運動からの刺激を受け、反英運動は、納税拒否、就業拒否、イギリス商品の不買運動という形をとってインド全土に拡がっていきます。オツベルが繰り返し口にした「税金」の問題も、ここにかかわってきます。イギリスは、インドにおける工業の発達と資本家の登場に伴い、資本家にとつてのみ有利な、彼らを懐柔する政策として、「税金」をめぐる制度を変えることで譲歩するそぶりを見せてきたのです。ガンディーの指導した第一期サティヤグラハ運動は、こうした欺瞞を暴いていくものとなりました。

けれども一九二一（大正一一）年の二月七日、群集が警察署を襲撃し警官を殺傷するという事件が発生し、非暴力的抵抗を訴え

てきたガンディーは、その限界をこえたと言明し、一連の不服従運動の中止を呼びかけます。この指令は運動を混乱させ、官憲による弾圧を招き、ヒンドゥー教徒とイスラム教徒の宗派間の争乱を激化させ、一九二四（大正一三）年には、それがピークに達することになります。

小森氏は白象のさびしい笑いについて「非暴力を徹底しようとしたガンディーの悲哀が共有されているのかもしれませんが、ロシア革命のように抑圧された者たちが解放されるためには暴力を避けることはできないという思いもこの結末に見いだすことができるでしょう」と述べる。象達の動きにインドの民衆運動が読み重ねられるという指摘はもつともだが、ここでは作中に「議長象」が登場することや「一せいに立ちあがり、まつ黒になつて吠えだす仲間象達の描き方から、ロシア革命など当時世界的に盛り上がりつつあった社会主義革命運動をイメージしてよいところであろう。

〈母なる自然〉のうながしが現実的形態としてはサンタマリアによつてイメージされたように、〈父なる自然〉のうながしは具体的には社会主義革命勢力によつてイメージされている。〈母なる自然〉は白象を救う役割をもち、〈父なる自然〉はオツベルを懲らしめる役割をもつ。〈母なる自然〉による救いだけではなく、白象を虐げるものを罰する〈父なる自然〉が登場する意味は大きい。「なめとこ山の熊」では淵沢小十郎が町の商人に体よくだまされることに語り手は憤慨しながらも商人に罰は下らなかつたが、本作ではそれに対する罰も用意されているのである。

四、無垢への憧れ

象達の手によつて救われた白象は「さびしくわらつて」礼を言う。そのさびしさはオツベルの死によつて白象が「修羅」の現実へ気づいたものであった。「やまなし」では子蟹達が翌日「イサド」へ行くことによつて、「修羅」の現実を知るといふ暗示が与えられたにとどまつたが、本作ではオツベルの死によつて白象がその現実を知るところまで記される。「よだかの星」のよだかが自己が生き物を殺す存在であることに気づいたように、自己が「修羅」の世界と無縁でないことに気づいた白象は自分の生き方を選択するにいたる。

「母なる自然」や「父なる自然」は無垢な白象を救う天の手であった。だがその無垢を失つた白象が生きる道は「母なる自然」や「父なる自然」を模倣するところにはなかつた。白象が選り取る道は慈愛をもつて救う「母なる自然」の道でも、懲罰を与える「父なる自然」の道でもない。キリスト教的なもので社会主義的なものでもない。白象は聖なる色を身につけていたが、オツベルの死によつて初めてその聖なる色にあざわしい道を選り取るのである。その道は自己犠牲にもとづく生き方であった。『法華経』に登場する普賢菩薩の乗り物として仕えていく白象は、菩薩の従者となることで宗教的聖性を帯びた存在となる。「修羅」の現実を知つた白象は今後再び自己救済を求めないだろうし、サンタマリアも現れることはない。だが一方で、本作が白象誕生譚でありながら、「母なる自然」「父なる自然」のうながしが白象の苦境を救う天の手としてあつたこと

を見逃してはなるまい。「母なる自然」「父なる自然」のうながしは、白象の無垢な状態を損なわずまいとする願ひに基づくものであつた。無垢な存在が「修羅」の現実へ気づくことがないよう、白象はつとめて「修羅」の世界から遠ざけられる。それはいづれ白象が「修羅」の世界に入っていく運命にあるにせよ、少しでも猶予を与えてやりたい「母なる自然」の優しさである。そしてその裏返しとして、無垢な存在を過酷に扱い「修羅」の現実へ気づく時期を早めさせるものへの怒りが「父なる自然」の鉄槌となつて表されていた。子供はやがて大人になる。「修羅」の現実へ気づく。白象誕生譚を描くと同時に、賢治はそこにいたる途中に働いた無垢を守護する「母なる自然」「父なる自然」のうながしを憧れをこめて描いた。それは「修羅」の現実をいまだ知らない無垢な状態をこそ幸福と考えていたからであろう。逆に言えば「修羅」を知り、その現実を生きていくことの困難さを心得ていたからであろう。賢治童話にあつては無垢な存在は常に憧憬の対象となる。それは無垢性が否応なく失われていくという認識に基づくばかりでなく、「ひかりの素足」の幼い樗夫が「何にも悪いことがない」にもかかわらず、地獄の獄卒に「罪はこんどばかりではないぞ」と過去世の罪を責められるように、この世に生を受けた者は誰もが過去世の業を負つた因果の鎖にとりこめられているという認識があつたためであろう。そのことは結末の一句にも反映している。

「おや、「一字不明」、川へはいつちやいけなかつたら。」と結末で語り手の牛飼いがいう。「川」に入ることは白象がオツベルの仕事場に入つていったように、「修羅」の現実世界に入っていくことの

比喩である。だがそれがどういう結果をもたらすのかということに気づくこともなく、子供達は「川」に入りたがる。牛飼いが語ってきた物語は白象が自己の無垢性を失い、聖象としての生き方を選ぶというものであった。だが牛飼いが語った、へ修羅の現実を知った白象のさびしさは子供達に理解できるものではなかった。それは彼らが子供であるがゆえにいまだ死が何であるかに気づかない状態にあるからだ。そうした状態にある子供達が、牛飼いの制止に耳をかさないのも当然であろう。牛飼いの話を聞いていなかったかのように突然「川」へ入ろうとする子供達は、やはり彼らがへ修羅の現実を知らない幸福な存在であることを示すものであった。無垢な存在にはへ母なる自然へ父なる自然への守り手がついている。賢治は牛飼いの言葉を聞かれない子供達にいらだちを覚えたのではなく、子供達がへ修羅の現実を知る運命にあるとしても無心に遊ぶそのときの姿こそ幸福なものであると見ていたはずである。

付記 「オツベルと象」のテキストは『新校本宮沢賢治全集』（筑摩書房）に拠った。

注

- (1) 阿部昇『「オツベルと象」の読み方指導』（明治図書 一九九一年 八七頁）
- (2) 池上雄三『「オツベルと象」（『作品論宮沢賢治』）双文社 一九八四年）
- (3) 前掲(1) 九四―九八頁
- (4) 『宮沢賢治の神秘―「オツベルと象」をめぐる―』（鳥影社

- 一九九二年 三一頁）
- (5) 前掲(4) 七七頁
- (6) 前掲(4) 三七頁
- (7) 『宮沢賢治を解く―「オツベルと象」の謎―』（鳥影社 一九九三年 九一頁）
- (8) 前掲(4) 四三二頁
- (9) 前掲(1) 七七―七九頁
- (10) 菅野宏『「オツベルと象」の読み方』（『表現研究』一九六六年三月）
- (11) 谷川雁『賢治初期童話考』（潮出版社 一九八五年 一六四頁）
- (12) 前掲(11) 一六四―一六五頁
- (13) 渡辺正彦『宮沢賢治「オツベルと象」―教材としてどう読むか』（『国語教育評論』一九八七年七月）
- (14) 前掲(1) 六三頁
- (15) 前掲(7) 一一三頁
- (16) 前掲(4) 三〇頁
- (17) 前掲(7) 三一頁
- (18) 前掲(4) 八二頁
- (19) 拙稿「美と無垢と―「やまなし」論―」（『日本文学』一九九五年 一二頁）
- (20) 紀野一義『「法華経」を読む』（講談社現代新書 一九八二年 一四〇―一四二頁）
- (21) 小森陽一『最新宮沢賢治講義』（朝日新聞社 一九九六年 一八七―一九〇頁）